

Robin Hood and the Monk 試論

筏 津 成 一

(昭和60年 5 月31日受理)

序

Robin Hood cycleの中で最も古いものの一つに *Robin Hood and the Monk* (Child, 119, 以下 *Monk* と略記)がある。これは1450年頃の写本の中に発見されたもので、F. J. Child 教授が‘Too much could not be said in praise of this ballad, but nothing need be said’ と称賛して以来、⁽¹⁾ narrative として最も完成されたものとして評価されてきた。⁽²⁾ この *Monk* の面白さは、美しい Sherwood の森、Nottingham の町、そして宮廷を舞台背景として、そこに繰り広げられる登場人物 (Robin Hood, Little John, monk, sheriff, king 等) のスリルに満ちた interplay にある。そしてそれは、ballad 特有の抑制が効いて暗示に富む economical な、そして臨場感に溢れる dramatic な style によって語られている。本小論では *Monk* のこうした narrative としての特徴を Robin と John という二人の主人公の interplay を中心に、ストーリーの展開に沿って考察してみたい。

1

一般に、traditional ballads においては setting について詳しい描写は行われず、物語は直ちに action へと展開してゆく。しかし Robin Hood ballads においては setting は重要な意味を持っており、*Monk* も、中世の troubadours の詩や、かの有名な Chaucer の *The Canterbury Tales* の *General Prologue* を思い起こさせる伝統的な seasonal *incipit* で始まっている。

In somer, when the shawes be sheyne,
 And leves be large and long,
 Hit is full mery in feyre foreste
 To here the foulys song.

To se the dere draw to the dale,
 And leve the hilles hee,
 And Shadow hem in the leves grene,
 Under the grene wode tre. (1-2) ⁽³⁾

ここには5種類の頭韻 ('shawes-sheyne,' 'leves-large-long,' 'full-feyre-foreste-foulys,' 'dere-draw-dale,' 'hilles-hee') が重層的に配置され、互いが交響し合って非常にリズムカルで美しい表現になっている。Child教授が

The landscape background of the first two stanzas has been often praised, and its beauty will never pall. It may be called landscape or prelude, for both eyes and ears are addressed, and several others of these woodland ballads have a like symphony or setting.

と指摘しているように、⁽⁴⁾ここには緑林 ('grene wode') の merriness を視覚と聴覚の両方から訴えかけようとする技巧が感じられる。美しい陽の光が溢れ、小鳥が囀り、鹿が谷を渡り、緑の生い茂る Sherwood の森が outlaw の世界そのものであり、そこに満ち溢れる merriness こそが Robin Hood ballads の持つ essential な魅力であった。⁽⁵⁾他方、この outlaw の世界に対立するものとして、教会の権威や法の秩序に縛られた Nottingham の町の生活があり、monk, sheriff といった antagonist はそれらの象徴である。そしてこの二つの世界の対立は Robin Hood ballads に共通する一つの重要なテーマになっている。⁽⁶⁾例えばそれは、Sherwood の森 ↔ Nottingham の町という場面の移動においても Robin の心理状態に微妙に投影されてくる。

Then Robyn goes to Notyngnam,
 Hym self mornying alone,
 And Litull John to mery Scherwode,
 The pathes he knew ilkone. (16)

原因不明の仲違いをした Robin と John は別々の道を辿って行く。Robin はたった独りで寂しく ('Hymself mornying alone') Nottingham の町へ、かたや John は自分の慣れ親んだ道 ('The pathes he knew ilkone') を通って Sherwood の森へと帰って行く。これに対して物語の後半第76連においては、全く対照的な Robin が描かれている。

The scheref made to seke Notyngham,
 Both be strete and stye,
 And Robyn was in mery Scherwode,
 As light as lef on lynde. (76)

ここでは Nottingham の町を隅々まで ('Bothe be strete and stye') 懸命に搜索する sheriff と、救出されて Sherwood の森へ帰って行く Robin とが対比されている。そして Robin の喜々とした様子は 'As light as lef on lynde' という頭韻を含む simile によって vivid に表現されている。また上の二例でもう一つ注目してよいのは、Sherwood の森の修飾語としての 'mery' の使用である。この平凡な epithet の使用によって Nottingham の町とのコントラストが一層鮮明になっており、ここに minstrel の然り気ない技巧を感じることができる。

以上のように、*Monk* はその舞台背景として「Sherwood の森」と「Nottingham の町」の対立という枠組を持っており、その意味において、seasonal *incipit* は単なる前口上ではなく、outlaw の世界を象徴するものとして重要な役割を果たしていると言えよう。

2

Hit befel on Whitson(tide),
 Erly in a Mây mornnyng,
 The sun up feyre can shyne,
 And briddis mery can syng.

 'This is a mery mornnyng,' seid Litull John,
 'Be hym that dyed on tre ;
 A more mery man then I am one
 Lyves not in Cristiante. (3-4)

この一見唐突にみえる Little John の登場は (ballad の常套手段ではあるのだが)、実は 'briddis mery,' 'mery morning,' そして一種の pathetic fallacy とも言うべき⁽⁷⁾ 'mery man' における 'mery' という形容詞の巧妙な反復によって導かれている。この 'mery' は *Monk* の全90連中に9回 (その中の2回については既に言及した) 使用されているが、その中の4回は、冒頭4連に集中しており、平凡ではあるけれど、この ballad の thematic word とも言うべき 'mery' が、conventional な nature-opening

から一転して登場人物による対話への移行に重要な役割を果たしていることが解る。

この John の快活さとは対照的に Robin には一つの悩み事があった。

Ye[a], on thyng greves me', seid Robyn,
 'And does my hert mych woo ;
 That I may not no solem day
 To mas nor matyns goo. (6)

2週間以上も教会のミサに行っていないのである。彼のこの敬虔さ (piety) が、彼を大胆にも Nottingham へと向わせた理由であり、続いて起る全ての出来事の発端であった。Robin は Much の 'Take twelve of thi wyght yemen/Well weppynd, be thi side' (第8連) という忠告を無視して John 1人を連れて出かける。そしてこれは次に二人の間に起る「不思議な争い」 ('A ferly strife') を暗示している。

A ferly strife fel them betwene,
 As they went bi the wey ;
 Litull John seid he had won five shillings,
 And Robyn Hode seid schortly nay.

With that Robyn Hode lyed Litul Jon,
 And smote hym with his hande ;
 Litul Jon waxed wroth therwith,
 And pulled out his bright bronde.

'Were thou not my maister,' seid Litull John,
 'Thou shuldis by hit ful sore ;
 Get the a man wher thou wil[t] ,
 For thou getis me no more.' (13-5)

この争いはどちらの非によるものか定かではない。しかし Robin の有無を言わせぬ強引な否定 ('And Robyn Hood seid schortly nay') とそれに続く罵り、そして暴力は Robin の非を暗示させるに十分である。また主人のこうした仕打ちに対する John の 'Get the a man wher thou wil[t]/For thou getis me no more' という言葉は、二人の争いに reality を与えていると同時に John の気性の激し

さをも示している。このようにして、いつの間にか我々は ballad 特有の economical な語り口によって巧妙にストーリーの流れの中に巻き込まれてしまうことになる。更に、この争いは次に Robin の身に降りかかってくる災いを暗示しているが、これもまた narrative economy の一例である⁽⁸⁾

3

John と別れて Nottingham にやって来た Robin は、身に迫る危険を感じてか、神と聖母マリアに加護を祈る。

Whan Robyn came to Notyngham,
Sertenly withouten layn,
He prayed to God and Myld Mary
To bryng hym out save agayn (17)

ここには minstrel ballad の文体的特徴の一つである、minstrel's padding が見られる。これは押韻させるのが困難な詩行を満たすために、或いは、単に話の真実性を強調するために minstrel が用いた慣用表現で、⁽⁹⁾この 'Sertenly withouten layn' の他に 'For sooth, as I yow say' といった形も見られる。これらは物語全般に渡って、narration の部分だけではなく direct speech の中にも見られるが、詰る所、minstrel ballad の poetic texture としての貧困さの証左でもある。

Robin が教会で祈りを捧げているところを目撃した monk は直ぐさま、Nottingham の町の全ての門を閉めさせる。ここでも simple で expressive な表現のタッチ⁽¹⁰⁾は生きていて、monk の背後の騒然とした町の様子が生き生きと伝わってくる。

Out at the durre he ran,
Fful sone and anon ;
Alle the gatis of Notyngham
He made to be sparred evrychon. (20)

そして場面は sheriff の所へと急転する。いわゆる ballad の narrative transition である。

'Rise up,' he seid, 'thou prowde schereff,
Buske the and make the bowne ;

I have spyed the kynggis felon,
Ffor sothe he is in this town.

'I have spyed the false felon,
As he stondis at his masse,
Hit is long of the, 'seid the munk,
'And ever he fro us passe. (21- 2)

ここには'I have spyed . . .'というパターンの反復が見られるが、D. C. Fowler は ballad 発達の歴史的視点から次のように述べている。

Although the tale of *Robin Hood and the Monk* lacks the narrative symmetry we found in the *Gest*, it does have some good examples of incremental repetition, and it is interesting to note that this latter feature often appears in conjunction with the stylized epithets of late medieval romance ('thou prowde schereff') and the diction of alliterative poetry ('Buske the and make the bowne') . . . This is a particularly interesting example because it shows so well the lingering technique of later balladry beginning to emerge in a context of late medieval minstrelsy.⁽¹¹⁾

そして彼の言うように、この反復の機能を 'lingering,' 即ち物語を suspend するものと考えれば、第21連前半二行が第24連において、

Up then rose this prowd schereff
And radly made hym yare ; (24)

という形で、speech から narration へと mode を変えて繰り返されているのは、それを resume するためのものである。従って、ここでは反復が非常に functional に使用されているとすることができる。この反復の手法は、この後も monk と page の殺害 (第47- 8, 52連)、Robin と John の和解 (第77-80連)、そして最後の国王の speech (第84- 9 連) といった物語の重要局面において使用されている。

ここで話をストーリーに戻すと、monk の知らせを受けて sheriff と民兵達は Robin を捕えるために教会へ押し入っていく。

In at the dures thei throlly thrast,
 With staves ful gode wone ;
 'Alas, alas !' seid Robyn Hode,
 'Now mysse I Litull John.' (25)

Johnとの争いによって暗示された危険がここにおいて現実のものとなる。そして Robin は敵に包囲されながら 'Alas, alas ! Now mysse I Litull John' と叫んで自分の犯した誤ちを大いに後悔する。そして壮烈な立ち回りの末に捕われの身となってしまう。

4

写本の脱落によって、⁽¹²⁾ いかにして Robin 逮捕の知らせが Sherwood の森へ届けられたかは不明であるが、場面は急転して、嘆き悲しむ部下達の姿が描き出される。

'Let be your rule.' said Litull Jon,
 'Ffor his luf that dyed on tre ;
 Ye that shulde be dughty men
 Het is gret shame to se.

'Our maister has bene hard bystode
 And yet scapyd away ;
 Pluk up your hertis, and leve this mone,
 And harkyn what I shal say. (32-3)

その中で John 一人だけが冷静で ('non of theym wer in her mynde/But only Litull Jon') (第31連) 気持をしっかりと持つようにと彼らを激励する。この 'Pluk up your hertis' は冒頭第5連においても 'Pluk up thi hert, my dere mayster' という形で現われており ballad の言語が formulaic であることを示すものである。と同時に、characterization という観点からみれば、John の生来の明るさ ('A more mery man then I am one/Lyves not in Cristiante') (第4連) を表わしていると考えられることもできる。そして Robin に対する遺恨も忘れて、自ら Robin の救出に向かう。

And I shal be the munkis gyde,
 With the myght of mylde Mary. (35)

ここで忘れてはならないのは、次の John の outlaw 達への指し図である。

'Loke that ye kepe wel oure tristil tre,
 Under the leves smale,
 And spare non of this venyson,
 That gose in thys vale.' (37)

この「約束の木」('tristil-tre') は他の Robin Hood ballads においてもしばしば言及されているが、⁽¹³⁾ 森の中の一つの重要な目印になっている。そして、これをしっかり守れ ('Loke that ye kepe wel oure tristil tre') という指示は、greewood における日常の陽気な生活パターンを維持せよ、即ち、'spare non of this venyson/That gose in thys vale' という指示と密接な関連を持つことになる。⁽¹⁴⁾ 換言すれば、この「約束の木」は Sherwood の森の平穏な生活の symbol と考えることができる。序でに 'Under the leves smale' に関して言えば、*Monk* では次のような variation が使われている。

| | |
|----------------------------|-------------------|
| Under the grene wode tre | (第2連, hee と押韻) |
| Under the grene wode lyne | (第10連, myne と押韻) |
| Under the grene wode lynde | (第23連, mynde と押韻) |
| Under the leves smale | (第37連, vale と押韻) |
| Under grene-wode lyne | (第78連) |
| Under the levys smale | (第82連, ale と押韻) |

これらは第78連を除いては何れも各連の2行目、または4行目という rhyming position に来ており、refrain のような働きをしている。これも一種の minstrel's padding とってよいかもしれないが、舞台背景としての Sherwood の森を連想させるという点で functional である。

John と Much は一緒に出かけて行って、Much のおじさんの家の二階から monk 達を待ち伏せる。

Litull John stode at a wyndow in the morning,
And lokid forth at a stage ;
He was war wher the munk came ryding,
I know hym be his wyde hode.' (39)

この場面の長閑かさは、Robinの逮捕の時の町の騒々しさや緊迫感と著しい対照を成している。E. K. Wellsはこの場面について次のように述べている。

Here the feminine endings helps to lengthen and quieten the verse. We feel there is plenty of time for Little John and Much to descend and be found by the monk strolling along the road, time to indulge in amenities with him, "as curtes men and hende."⁽¹⁵⁾

立派な身形に変装した二人は monk の道連れとなって Robinの様子を聞き出す。そしてこの報せが国王の元へ届かないように monk と page を殺害してしまう。この場面は、既に述べたように、反復の手法で描写されているが、それはやや複雑な形態をとっている。

As thei went talking be the way,
The munke and Litull John,
John toke the munkis horse be the hede,
Fful sone and anon.

Johne toke the munkis horse be the hed,
Ffor sothe as I yow say ;
So did Moch the litull page,
Ffor he shulde not scape away.

.

John smote of the munkis hed,
No longer wolde he dwell ;
So did Moch the litull page,
Ffor ferd lest he wold tell. (47- 8, 52)

第47連の後半二行が第48連の前半二行で少し形を変えて反復され、それは後半二行と parallelism を成している。更に、この第48連は第52連と parallelism を成している。結果として、Monk 殺害の場はこの parallelism によって包み込まれた形になり、一つのまとまった action の場を構成することになる。そして内容的にみても、ここには興味深い点がいくつか含まれている。

Be the golett of the hode
 John pulled the munke down ;
 John was nothyng of hym agast,
 He lete hym falle on his crown. (49)

John が monk の hood の喉元を引っばると、彼は自分で勝手に頭から転げ落ちた ('He lete hym fall on his crown') というのは、如何にも ironical な描写である。また第51連における John の 'He was my maister/That thou hase browght in bale' という言葉の中には、Robin の侮辱にも拘らず未だに John が彼に対して抱いている強い忠誠心を感じることができる。Douglas Gray はこの 'intense personal loyalty' が第52連における page の殺害、或いは第70-1 連における porter の殺害といった不必要な暴力を引き起こす原因であると指摘する。そして Maurice Keen の 'In part the violent spirit of the outlaw stories represents the attachment of a past age to the principle of retributive justice . . . Their violence is really part of the common human reaction to unrelieved oppression.'⁽¹⁶⁾ という意見を論拠にして、こうした暴力の描写は、outlaw の生活における実際の暴力を反映させているこれらのエピソードに reality を与えていると述べている。⁽¹⁷⁾

6

こうして John と Much は monk の手紙を国王の元へ届ける。これに対して国王は褒美として、彼らに20ポンドを与え、彼らを国王の従者 ('yemen of the crown') にする。そして二人は国王の璽印のある手紙を持って Nottingham へと帰って行く。町へ着くと John は sheriff を探し出して、この手紙を手渡すが、国王に対してと同様に、⁽¹⁸⁾ ここでも John の機知に富んだ応対が見られる。Sheriff が monk の消息を尋ねたのに応えて次のように言っている。

'He is so fayn of hym,' seid Litul John,
 'Ffor sothe as I yow say,

He has made hym abot of Westmynster,
A lorde of that abbay.' (66)

そして夕食後、sheriff が酔っ払って眠ってしまった頃を見計らって牢獄へ行き、ひと芝居を打つ。

Litul John callid up the jayler,
And bade hym rise anon ;
He seyde Robyn Hode had brokyn prison,
And out of hit was gon. (69)

こうした John の一連の機知に富んだ行動は、'real hero'⁽¹⁹⁾としての彼に相応しいものとも言える。そして翌朝になって、jailer が死体として発見される。

Be that the cok began to crow,
The day began to spryng ;
The scheref fond the jaylier ded,
The comyn bell made he ryng.

He made a crye thoroowt al the tow[n] ,
Wheder he be yoman or knave,
That cowthe bryng hym Robyn Hode,
His warison he shuld have. (73-4)

Sheriff は町の鐘 ('comyn bell') を鳴らし、町中に御触れ ('a cry') を出して、懸命に Robin 達を探す。ここには第20連において、「全ての門を閉めよ」という命令が出された時と同様な、騒然とした町の様子が描かれ、Robin, monk, sheriff といった主要登場人物の背後にいる、多くの群集の存在がクローズアップされている。⁽²⁰⁾

こうした騒ぎを他所に Robin は Sherwood の森へ帰ってくる。ここで John は、急に二人の争い、そして自分の誓い ('thou getis me no more') を思い出して、次のように言う。

Then bespake gode Litull John,
To Robyn Hode can he say,

'I have done the a gode turne for an evyll,
 Quyte the whan thou may.

'I have done the a gode turne', seid Litull John
 'Ffor sothe as I yow say ;
 I have brought the under grene-wode lyne ;
 Ffare wel, and have gode day.' (77-8)

ここでは一種格言風な'I have done the a gode turne for an evyll'という言葉の反復によって、この物語の主題（即ち、Robin と John の「争い」と「和解」）が強調されており、反復の機能的使用とすることができる⁽²¹⁾。また、この2連の中に'gode'という stock epithet が4回使用されているが、この語はストーリーの展開と共にかなり意識的に使用されていると考えても良い。例えば第19連では、'gret-hedid munke'と対比されて'gode Robyn'となっており、危険な運命に曝されようとしている Robin に対する narrator の感情がこの語に込められている。更に、第72連において、John が身を守るようにと Robin に手渡したのは'gode swerd'であった。それは取りも直さず我々に次の場面を思い起こさせる。

His sworde upon the shireff hed
 Sertanly he brake in too ;
 'The smyth that the made,' seid Robyn,
 'I pray to God wyrke hym woo ! (28)

そして、個人的な恨みを水に流して主人に忠誠を尽したのは'gode Litull John'である。このように、紋切り型の value word である good の使用にも、merry と同様に thematic word としての周到な配慮が成されている。

かくして Robin と部下達は嬉しい再会をして、森の木の下でワインと鹿の肉で祝宴を張る。

They filled in wyne, and made hem glad,
 Under the levys samle,
 And yete pastes of venyson,
 That gode was with ale. (82)

この場面は、既に見た Robin 不在の greenwood の場面 (第37連) と対比的に描かれており、森に平和が戻ってきたことを表わしている。そして 'levys smale', 'venyson' は green-wood の imagery として使用されていることが解る。

7

Robin の帰還によって事実上、物語は終るが、場面はもう一度宮廷へと移っていく。Robin の逃走の報せを聞いた国王は怒りを込めて ('In angur hye'), Little John の裏切りについて話す。ここでも一連の巧妙な反復の手法 ('a richly elaborated series of repetitions')⁽²²⁾が見られる。

'Little John hase begyled the schereff,
In faith so hase he me.

'Litul John has begyled us bothe,
And that full wel I se ;
Or ellis the schereff of Notyngham
Hye hongut shulde he be.

'I made hem yemen of the crowne,
And gaf hem fee with my hond ;
I gaf hem grith', seid oure kyng,
Thorowout all mery Inglond.

'I gaf theym grith,' then seid oure kyng ;
'I say, so mot I the,
Ffor sothe soch a yeman as he is on
In all Inglond ar not thre.

'He is trew to his maister,' seid our kyng,
'I sey, be swete Seynt John,
He lovys better Robyn Hode
Then he dose us ychon.

'Robyn Hode is ever bond to hym,
 Bothe in strete and stalle ;
 Speke no more of this mater', seid oure kyng,
 'But John has begyled us alle.' (84-9)

国王の名状し難い屈辱感は、refrainのように繰り返される'Litull John hase begyled us bothe . . . Iohn has begyled us alle'そして'I gaf hem grith'⁽²³⁾の反復によって表現されているが、同時に、我々は彼の yeoman, 特に Little John に対する称賛の気持を読みとることができる('Ffor sothe soch a yeman as he is on/In all England ar not thre')⁽²⁴⁾そして彼は、結局 John は自分より Robin に対してより忠実であった('He is trew to his maister/He lovys better Robyn Hode') という諦観に至る。つまり、この宮廷のエピソードは、John と Robin の和解という平凡で余情に乏しい loose な結末を引き締める役割をしており、それがこのような'open ending'⁽²⁵⁾になった理由ではなかろうか。こうして、narrator は conventional な神 ('a crowned kyng') への invocation で物語を結んでいる。

Thus endys the talkyng of the munke
 And Robyn Hode I wysse ;
 God, that is ever a crowned kyng,
 Bryng us all to his blisse ! (90)

結 び

以上、ストーリーの展開に従って *Monk* の narrative としての特徴を、概観してみた。これらは次のように要約することができよう。まず第一に、*Monk* は「outlawの世界」と「権力・秩序の世界」の対立という図式を物語の枠組として持っており、Sherwoodの森、Nottinghamの町という setting や、Robin Hood, Little John, monke, sheriff といった登場人物は、それらの象徴として描かれている。更にストーリーの構成は緊密で、ここに繰り広げられる様々なエピソードは互いに密接な関連を持っている。そしてこれらを語る文体は economical で、suggestive で dramatic である。そして有り触れた平凡な語の使用の中にも minstrel の周到な技巧の跡を感じることができる。また、こうした構成の緊密さとは逆に、Robin Hood ballads 独特の、本筋から逸脱しようとする傾向——例えば、弓による賭けなどの game element, 或いは過剰暴力など——も見られるが、これらはストーリーに現実感を与えていると同時に、聴衆にとっての大きな楽しみの一つであり、folk literature の

本質をここにみることができる。このように考えると、J. C. Holt の 'It is a shallow tale, but one well and crisply told.' という言葉は正に至言と言えよう⁽²⁶⁾

(注)

- (1) *The English and Scottish Popular Ballads*, (5 vols. Boston, 1882-98), Vol. III, p. 95.
- (2) 'Ever since its first publication in the early nineteenth century, *Robin Hood and the Monk* has held justified pride of place as the most distinguished and artistically accomplished of all the Robin Hood ballads.' (Dobson, R. B. and Taylor, J., (ed.), *Rymes of Robyn Hood*, (London, 1976), p. 113.)
- (3) 以下、text からの引用は、spelling の読み易さを考慮して全て Dobson & Taylor (1976) による。尚、() 内の数字は連番号を示す。
- (4) Child, *op. cit.*, p. 95.
- (5) Friedman, A. B., (ed.), *The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World*, (New York, 1956,) p. 326.
- (6) Wells, E. K., *The Ballad Tree*, (New York, 1950), p. 21.
- (7) Hodgart, M. J. C., *The Ballads*, (New York, 1962), p. 44.
- (8) Gray, D., 'The Robin Hood Poems', *Poetica*, 18 (1984), p. 16.
- (9) Chambers, E. K., *English Literature at the Close of the Middle Ages*, (Oxford, 1945), p. 137.
- (10) Gray, *op. cit.*, p. 14.
- (11) Fowler, D. C., *A Literary History of the Popular Ballad*, (Durham, 1968), p. 82.
- (12) 'This sudden transition to Sherwood Forest where Robin's men are lamenting the news of his capture is only explicable in terms of the omission of a quite lengthy passage between stanzas 30 and 31,' (Dobson & Taylor, *op. cit.*, p. 118.)
- (13) 例えば、*A Gest of Robyn Hode* (第274連、第387連)、*Robin Hood and the Potter* (第56連) など。
- (14) Gray, *op. cit.*, p. 15.
- (15) Wells, *op. cit.*, p. 22.
- (16) Keen, M., *The Outlaws of Medieval Legend*, (Londen, 1961), pp. 217-8.
- (17) Gray, *op. cit.*, pp. 16-7.
- (18) John は国王の問いに対して次のように答えている。

'Where is the munke that these shuld have brought ?'

Oure kyng can say ;

'Be my trowth,' seid Litull John,

'He dyed after the way.'

(57)

- (19) '*Robin Hood and the Monk* is by contrast a blood-and-thunder adventure in which the real hero is Little John.' (Holt, J. C., *Robin Hood*, (London, 1982), p. 28.)

- (20) Wells, *op. cit.*, p. 22.
(21) Gray, *op. cit.*, p. 15.
(22) Fowler, *op. cit.*, pp. 82-3.
(23) これは第58-9連の内容を指している。

The kyng gaf Moch and Litul Jon
Twenti pound in sertan,
And made theim yemen of the crown,
And bade theim go agayn

He gaf John the seel in hand,
The shereff for to bere,
To bryng Robyn hym to,
And no man do hym dere. (58-9)

- (24) Gray, *op. cit.*, p. 17., Cf. 'While Robin Hood and his lieutenant are renewing their pledges of friendship at a forest banquet, the sheriff cringes in anticipation of the king's rage. The king, however, is more amused than angry at Little John's trick' (Friedman, *op. cit.*, p. 327).
(25) 'Robin Hood and the Monk has an interesting "open" ending.' (Gray, *op. cit.*, p. 17.)
(26) Holt, *op. cit.*, p. 30.